

## わが懐かしのニューヨーク

中島 淑恵

(富山大学教授)



移民都市らしく、父祖の代から住み着いている人も昨日来たばかりの人も、多少おかしい英語でも分け隔てなくフレンドリーに接してくれるまちの人々の陽気さであった。

最初に訪れた時からニューヨークの教会の多さには気づいていたのだけれど、昨春秋の滞在で気づいたのは床屋の多さである。おしゃれな美容院ではなく、いわゆる昔ながらの「床屋」である。気になって街を歩きながら観察してみると、実は床屋ごとに同じ人種の人が集まっているように見える。しかも、髪を切ってもらったり髭の手入れをしてもらったりしているだけではなく、順番待ちの間に世間話をしたりしている人もいて、どの床屋も活気があって、人々が楽しそうに集っている。

なぜニューヨークには床屋が多いのか、私なりに推論してみた。まず、腕さえあれば缺一つで開業できることから、移民先で言葉が不自由でもすぐに稼ぎやすい仕事だったからなのではないか、ということがある。まさに「芸

は身をたすく」である。そして、緊張感のある移民暮らしの中で、床屋に行く時くらいはお国言葉でのんびりしたいという気持ちがあるからではないか、ということもある。それに床屋は、仲間同士の重要な口コミ情報の交換の場であるのかも知れない。さらに髪質は人種によつて微妙に異なり、例えば我々がいくら西洋人の髪型に憧れても、なかなか思うようにはならないのである。

そんなニューヨークでのコロナ禍である。床屋で楽しそうに集っていたあの人たちが、どのような形にせよ被害に遭っているのだらうということ想像すると、暗澹たる心持ちになる。ポスト・コロナの時代には、人間のこれまでのあらゆる行動様式を根本から見直さなくてはならないと言われているけれど、あのニューヨークで床屋に集う人々の陽気なコミニケーションの喜びを、子どもたちの世代にも何とかして伝えたいと心の底から願っている。そして、そのために自分には何ができるのか、自問自答の日々が続いている。

なかじま としえ氏  
愛知県尾張旭市出身、富山市在住。富山大学人文学部教授。専門はフランス近代文学と比較文学。小泉八雲旧蔵書(ヘルン文庫)の調査や、フランスの詩の翻訳・研究を行っている。

こんな年が来るとは思ってもみなかった。ようやくピークを超えたとはいえ、我々はまだコロナ禍の最中にある。緊急事態宣言のもと陰鬱な黄金週間を過ごし、大学では遠隔授業が始まった。旅行はおろか外出も自粛し、テレビでは国内外の惨状が日々伝えられる。とりわけニューヨークの被害状況に、私は胸を痛めている。

私は仏文専攻で留学経験もあり、研修の引率や自分の研究のため今もほぼ毎年渡仏してい

る。けれどアメリカは、恥ずかしながら五十歳を過ぎてから初めて訪れることになった。その時はナッシュビルでの学会参加のためだったのであるが、初めて渡米するからには何としても憧れのニューヨークに足を踏み入れたいと願い、ニューヨークに数日滞在してからナッシュビル入りする日程を組んだ。この時は結局、学会発表の準備でほとんどホテルにこもりきりだったけれど、それでもニューヨークで何よりも気に入ったのは、